

2023 年度 学校自己評価報告書(法政大学第二中・高等学校)

<b>教育理念・目標</b>	<p>教育理念:本校における教育は、人格の完成をめざして国民的共通教養の基礎を築き、平和で民主的な国家および社会の形成者を育成することを目的とする。</p> <p>教育目標①:人類および民族のあらゆる分野における歴史的・文化的遺産を体系的に学び取り、自然と社会・人間に対する認識を深める。</p> <p>教育目標②:獲得した認識を総合し、自然との共生・諸民族の共同など、人類社会のもつ諸課題と向き合う視野を培う。</p> <p>教育目標③:学ぶことの意味と喜びを知り、常に学問的好奇心を発揮し、生涯にわたって成長を遂げることのできる土台を獲得する。</p> <p>教育目標④:自己を客観視し、社会の中でどのように生きるかを考える能力をつける。</p> <p>教育目標⑤:自己の諸課題の解決・現状の変革を担おうとする自主的精神と互いを尊重し共同での取り組みができる自治的能力を獲得する。</p> <p>教育目標⑥:高い品性と社会性を身につけ、不正・腐敗を許さず、社会正義を確立する自立の力を獲得する。</p>
----------------	---

<b>重点目標</b>	<p>1、教育目標を達成するために生徒一人一人に高い学力をつけさせるための具体的実践の研究をする。</p> <p>2、男女共学化 6 年目に際し、新たに表出する課題に対して対応する。</p> <p>3、新図書館やICTを活用した教育の研究と実践を深める。</p> <p>4、中高 6 ヶ年を視野に入れた生徒の自主活動を伸ばすための工夫をする。</p> <p>5、法政大学・育友会(PTA)・同窓会・地域との連携を強化する。</p>
-------------	---

共通課題

No.	評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
		年度目標		年度評価		実施日 2024 年 10 月 9 日
		現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	学校関係者からの要望、評価等
1	<b>建学の精神</b> (建学の精神や理念の理解と意識化)	<p>中学 1 年での「校外授業」、高校 1 年での「新入生合宿」を実施し、建学の精神や理念について、重点的に取り組むことができた。「学びのつながり」等を使用し建学の理念、大学史、二中高史等の学習を行った。</p>				左記について、異存はありません。
2	<b>組織運営</b>	<p>組織的・集団的な学校運営を今年度も引き続き重視した。年間の中で起こる課題に対して、個ではなく、集団での解決を目指した。また問題の本質についても教員集団全体で共有した。さらに、重点課題のもとに今後の課題についても議論を深めてきた。学内での教研集会や三付属校教研集会など教員集団での学びの場を大切に、一人一人のスキルアップや共同性の重要性を再確認することができた。</p>				左記について、異存はありません。
3	<b>教育活動</b> (教科、生活、進路、行事、自主活動等)	<p>教科教育においては、学校改革の一環として、「教科教育における 6 カ年体系化」の中長期計画に基づき、カリキュラム改革をおこなった。中学新教育課程が実施 3 年目となり、新カリキュラムも完成を迎えた。高校新教育課程は実施 2 年目となり、新学習指導要領に基づいて 2 年生の新たな科目の実践が始まった。新型コロナウイルスの 5 類移行後も感染症の拡大により学級閉鎖や学年閉鎖を行う時期があったが、授業進度の調整を図りながら、年間を通して通常時程での対面授業を実施した。学習方法についても、感染症対策を徹底しながら活動型の学習をカリキュラムに位置づけ、他者と協働しながら思考力・表現力を培う実践を積極的に進めた。学力向上に資するカリキュラムの再構築と実践を展開し、学力の到達状況に応じて特別指導や課題設定などの学習支援を継続した。こうした取り組みを通して、法政大学推薦に値する学力へ到達させることに努めた結果、各教科目の学力到達度、および法政大学への推薦率について前年度の水準を維持することができた。来年度も、学校コンセプトである「調べ、討論し、発表する」教科活動の一層の充実に向け、ICT 機器の活用や学習情報センターとしての図書館を活用した教科活動を推進するとともに、身につけさせたい学力の内実を精緻に分析し、生徒用タブレット導入や学校構想中長期計画を念頭に置いた教科教育のあり方について検討する。</p> <p>生活指導においては、5 月に新型コロナウイルスの扱いが 5 類に移行され、HR、行事、クラブ活動などほぼコロナ禍前に近い取り組みを展開することができた。行事については、各学年ともに感染対策を残しつつも通常実施することができた。中高ともに行事中から行事後にかけて感染症の広がりがあり、学級閉鎖や学年閉鎖などを行った学年があった。中 1～高 2 までの各学年の宿泊行事は友人とともに豊かな経験が出来るものとして各学年重視してきた。23年度も各学年集団を成長させる手立てとして無事実施することができた。中学体育祭は天候にも恵まれ、青団、オレンジ団に分かれ各競技を実施した。また、今年度も保護者が観覧できる形式で行い、保護者の方にも生徒の成長を見て頂くことができた。高校体育祭は 3 学年合同で実施し、ほぼ通常どおり実施できた。各クラス、各学年が結集する行事として取り組むことができた。コロナ禍を経て、新たな工夫も生まれている。二中文化祭・二高祭は中・高ともに工夫をこらし、各クラス教室で企画を実施した。一般の来校者の入場も可となり、非常に多くの方に二中文化祭・二高祭に参加していただくことができた。また、多くの制限があるなかではあるが、外部の方による飲食スペースも再開することができ、生徒も非常に喜んでいて、今年度も充実した行事を行うことができ生徒も満足していた。クラブ活動においては、試合や合宿がほぼ通常に戻り、生徒たちも学習との両立を行いながら熱心に取り組む、大きな成果を残した。</p>				<p>生徒の学習環境向上の一環として、ICT 化推進のための校内情報インフラ整備についての具体的な計画が一定程度纏まったことは評価される。</p> <p>また、各種学事行事については、生徒の規模や様々な制約を考慮しつつも、「自由と進歩」の校風の下、生徒の自主・自治性をより伸ばせるような学校側の意識改革、環境整備を望みたい。</p>
4	<b>安全・保健管理</b> (保健、安全、防災、)	<p>年度当初(4 月)に定期健康診断・体力測定を実施した。健康安全講習会については 7 月に生徒・教員ともに実施した。熱中症対策や AED の使用方法を含む心肺蘇生法や救急法についての</p>				左記について、異存はありません。

	施設等)	学習を行った。また、こころの問題に対処する体制を整えるために年間をとおしてカウンセリングルームを開室した。生徒、保護者と必要な連携が取れる体制をつくり、年間を通して維持できた。避難訓練については、「火災時の避難経路の確認」「大規模地震発生時の対応」に関わって合計3回実施した。また災害発生時における教職員の初動での動きを確認するために、教職員のみでの避難訓練も実施した。避難時の注意事項の確認・徹底も行き、整然と実施することができた。次年度も継続して大規模地震発生時の対応について検討を深めたい。	
5	連携 (保護者、卒業生、地域等)	育友会との連携を密に行い、育友会理事会の円滑な運営に寄与した。「育友会集中ミーティング」においては、学校と保護者の充実した意見交流を行うことができ、学校の教育活動を充実させることができた。日常的な保護者連携としては、年3回(7月・12月・3月)の保護者会やクラブ保護者会を軸に、クラス担任、養護教諭、カウンセラーを中心に、各学年がチームとなって生徒個々の実態把握と対応を行った。同窓会との連携については、19年度から始まった同窓会内部の問題がおさまらず、まったく連携をとることはできなかった。24年度以降は新たな連携方法を追求する必要がある。地域等との連携では、「地域に愛される法政二中高」をめざし、地域の方々からお寄せいただく各種ご意見への対応につとめた。武蔵小杉駅近辺の清掃への参加や二中文化祭・二高祭の商店街の出店等、地域との良好な関係を構築することができた。	かねてからの生徒の登下校マナーについてのご意見が多々寄せられる中、学校職員のみならず生徒たちも含め、通行者整理や清掃活動等、一過性ではなく日常的な取り組みを行うことで、より地域からの理解を得られるよう努める必要があるのではないかと。
6	大学との連携	法政大学とは、この間、大学に設置されている付属校連携室を基点に連携事業を進めている。高校入学後には、「法政大学憲章を学ぶための付属校生むけ教材開発プロジェクト」による冊子『学びのつながり』を高校1年の新入生合宿やホームルームで配布・活用している。内容は、法政大学が掲げる「自由を生き抜く実践知」にもとづき、①法政大学の理念、②法政大学の歴史(大学憲章への道)、③「地球社会の課題」とは何か、④中高生の「実践知」から構成されている。高校1年生では、3学期に「キャリアについて考える」ことをテーマに、法政大学の大学生や卒業生(社会人)による進路講演会を実施し、高校での生活や将来の職業について考える機会を持った。また、文理選択適性検査を実施し、将来の進路選択の動機付けを行った。高校2年生では、「ウェルカム・フェスタ」を実施し、法政大学教員による講演(大学と高校の学びをつなぐ)と座談会(大学での学びの魅力)を通じて、高校・大学における学びの魅力を共有した。また、市ヶ谷・多摩・小金井の各キャンパスに通う現役の大学生(卒業生)を招き、キャンパスや学部、大学生活についての講演会を行った。高校3年生では、各学部の大学教員による学部別進路講演会を実施した。志望する学部の説明を受け、進路を考える貴重な機会となった。また、推薦学部決定後の「3年3学期プログラム」の取り組みでは、生徒の調査研究活動をふまえたプレゼンテーション大会を実施し、大学教員から講評をいただいたほか、「まとめ」としての論文作成を行った。さらに、大学入学前オリエンテーションや入学前課題などでも大学と連携して取り組んだ。高大連携企画として、ウェルカム・フェスタの他、高校生を対象にワンデー・サイエンス・カレッジ(小金井キャンパス)、多摩キャンパス体験学習プログラム、イングリッシュキャンプを実施し、希望生徒が複数参加した。また、総長杯英語プレゼンテーション大会には、複数の生徒が参加して受賞するなどの活躍がみられた。中学と大学との連携は今後の課題である。次年度も、生徒の進路選択を保障する取り組みを具体的に推進し、連携を深めたい。	左記について、異存はありません。

付属校独自課題

No.	評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
		年度目標		年度評価		実施日 2024年10月9日
		現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	学校関係者からの要望、評価等
1	入試広報	今年度も「法政大学の付属校としての学び」の内実と魅力を、受験生・保護者にきちんと伝えることを重視して広報活動を展開した。コロナ禍が明けて、学外広報イベントが多く、可能な限り参加した。また、時期に応じたテーマを設定し、オンラインを活用した説明会・相談会も展開した。学校説明会、学校公開については、コロナ禍前とほぼ同じ規模で実施することができた。またオンラインによる説明会、個別相談会も実施し、受験生・保護者のニーズに応え、実際、参加者によるアンケートでも高い満足度が示された。入試については、中高ともに安定的に志願者数を確保した。実施にあたっては、全教職員の協力のもと、無事に終了することができた。結果として適正な選抜方法によって、適正な人数の入学者を確保することができた。今後も本校の教育の中身をより具体的にアピールしていくことが大切となる。その方法については継続的に検討を重ね、積極的に入試広報活動を展開する。	左記について、異存はありません。			
2	2023年度学校構想 (国際交流の推進)	長期留学希望者については、前年度と比較して若干減り、14名であった。物価高騰など、様々な要因が考えられるが、全体的な留学相談の件数も減り、留学希望の波が一旦落ち着いた。一方で、本校が主催するニュージーランド短期研修、カナダ研修プログラムを3年ぶりに再開し、それぞれ約30名の生徒たちが参加し、盛況であった。しかし、残念なことにカナダ研修は現地の学校が閉校したため、24年度の実施を見送ることとなった。ニュージーランド研修は人気を集め、2024年度のプログラムに関しては定員を大きく上回る応募があり、選抜を行い参加者を決定した。オレワカレッジとの交流では、年間留学プログラムに加えて、新たにターム留学プログラムの協定を結び、年間留学1名、ターム留学1名の生徒を現地に派遣した。2024年1月には、3年ぶりに教員の派遣プログラムも再開し、オレワカレッジより、体育科の先生が1名来校し、本校で研修を行った。このように、オレワカレッジとの関係をさらに深化させることができた。学内での国際交流も積極的に行われた。2023年度は長期留学生(約1年)を3名、ターム留学生(3ヶ月)を1名受け入れ、さらに1月より約1週間、スウェーデンのクララ高校から2名の学生を受け入れた。生徒たちは日常の学校生活、様々な学校行事を通して、留学生たちと交流した。生徒の国際交流委員会についても、留学生と交流するイベントを多く行うことができ、次年度も引き続き活発に活動していく予定である。	左記について、異存はありません。			